

意思や気持ちを伝えるための英語教育へ

鈴木 利彦

1. 「英語が使える日本人」育成と本書の特長

文部科学省が平成15年に発表した『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』では、「高等学校卒業段階」で「日常的な話題について通常のコミュニケーションができる」ことを目標とし、その目標に沿った「英語教育改善のためのアクション」(p.2)では次のように述べられています。

「英語が使える」ようになるためには、文法や語彙などについての知識を持っているというだけでなく、実際にコミュニケーションを目的として英語を運用する能力が必要である。このため、英語の授業においては、文法訳読中心の指導や教員の一方的な授業ではなく、英語をコミュニケーションの手段として使用する活動を積み重ね、これを通して、語彙や文法などの習熟を図り、「聞く」「話す」「読む」「書く」のコミュニケーション能力の育成を図っていく指導の工夫が必要である。

『ポールスター英語表現Ⅰ・Ⅱ』は、まさにこの目標に沿った教科書であると言えます。「Ⅰ」では「重要文法事項をひと通り学び、それを土台にして実生活に役立つ発信力を身に付ける」ことを、「Ⅱ」では「文法の知識をもとに、本格的・総合的な表現力を身に付ける」ことを目標としています。

本書はパラグラフ・ライティングを通じて様々なトピックを英語で論理的に表現できる能力を育成し、自由英作文、スピーチ／プレゼンテーション／ディスカッション／ディベートまで、無理なく着実にレベルアップできる構成となっており、「文法の知識を土台にし、本格的・総合的な表現力を無理なく身に付けることができる教科書」として設計されています。また「書く」「話す」の生産的2技能を中心に、「読む」「聞く」の受容的2技能とも有機的に関連させる演習が随所に設けられ、学習者が幅広い言語活動に取り組むことができ、かつ積極的に授業に参加できるよう配慮されています。

評価においても、改訂版から「ルーブリック評価」を採用し、「内容・構成・文法」の3つの観点から「目標に準拠した評価」(「英語教育改善のためのアクション」(p.3))を行うことができるようになっています。

2. 「情報交換」から「意思や気持ちを伝える」ための英語教育へ

『ポールスター英語表現Ⅰ・Ⅱ』の更なる特長として、「意思や気持ちを伝える」ための表現を学ぶ活動が豊富に盛り込まれている点が挙げられます。私の専門分野であるスピーチアクト(発話行為)、ポライトネス、さらにモダリティ(法性)などの要素が多数盛り込まれており、「話者の意思」が助動詞などによってどのように表されるか、また「依頼」「招待」といった「スピーチアクト(言語の働き)」でどのような表現や方策が用いられるかを学ぶことができます。英語を使用して実際にコミュニケーションを行うためには、単なる「情報交換」を超えて、言語の使用場面ごとの「話者の意思」、「言語の働き」、「場面にふさわしい言葉遣い」の表現方法を学習することが肝要です。私自身の研究教育活動においても、これらのテーマが「国際コミュニケーション教育」の今後の課題として浮かび上がってきています。そのような意味でも『ポールスター英語表現Ⅰ・Ⅱ』を使用することによって、高校英語の段階で「本格的・総合的な表現力」を身に付けることができるということは、「日本人の英語コミュニケーション能力育成」という目標にとって非常に有意義であると考えられる次第です。

参考文献

・『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』文部科学省(平成15年3月31日)

(早稲田大学教授)

Revised POLESTAR English Expression I 著者